

P-197 ET-18-0CH₃ および etoposide の
細胞周期および細胞核内蛋白に及ぼす影響

川崎医科大学

藤原恵一、大石雄二、澤田 聡、山内英明、
毛利浩子、河野一郎

〔目的〕 細胞膜をターゲットとした新しいタイプの抗癌剤 ET-18-0CH₃ の作用機序を解明する
目的で、その細胞周期と核内蛋白に及ぼす影響
を DNA-interacting agentである etoposideと
比較検討した。〔方法〕 BG-1 卵巣癌細胞株を
etoposide および ET-18-0CH₃ に接触させた後
に、細胞を回収し、spinnersalt で洗浄したう
えで Triton X-100 を用いて細胞膜を破壊し、
核を分離回収した。細胞核をpropidium iodide
と fluorescein isothiocyanate で二重蛍光染
色しflow cytometerによって、DNAと nuclear
proteinの分析を行なった。〔成績〕 BG-1 細胞
は、etoposideおよび ET-18-0CH₃ の処理によ
って、いわゆるG₂/M blockを起こした。etoposide
処理をした細胞核では、無処理 controlに比較
して核内蛋白の分布が広がっていたのに対し
て、ET-18-0CH₃ で処理をした細胞では、cycling
cell内の核内蛋白には著明な変化はみられな
かった。しかしながら、ET-18-0CH₃ の処理を受
けた細胞では、G₁/G₀ peakの左側に hypodiploid
fraction が出現し、この部分の 核内蛋白量は
log scale を用いなければ検出できないほど有
意に高値であった。 etoposideで処理した細胞
では、ET-18-0CH₃ 処理細胞群よりも有意なG₂/M
blockが出現した場合でも、hypodiploid frac-
tionの増加は認められなかった。形態学的には
etoposide処理をした細胞核は ET-18-0CH₃ 処理
をした細胞核よりも膨化が著しかった。〔結論〕
ET-18-0CH₃ は、卵巣癌細胞に対して、細胞周期
に及ぼす影響、核蛋白の変化において極めてユニ
ークな作用機序を有している抗癌剤であるこ
とが判明した。

P-198 卵巣表面漿液性乳頭癌 (SSPC) の
3例

石川・辰口芳珠記念病院、金沢大*

富松功光、村上弘一*、生水真紀夫*、岩脇俊也*、
村戸政夫*、寺田 督*、荒木克己*、赤祖父一知*

卵巣表面漿液性乳頭癌 (serous surface papillary
carcinoma; SSPC) は、卵巣表面を原発とする比較
的稀な腫瘍である。卵巣が正常大にもかかわらず、
卵巣表面から腹腔内に播種したいわゆる normal-
sized ovary carcinoma syndromeの1例、転移巣にて発
見された2例、計3例のSSPCを経験したので報告す
る。〔症例1〕66歳。平成3年8月に腹部膨満感で
受診。大量の腹水を認め、子宮内膜吸引及び腹水
細胞診にて腺系の悪性細胞を認めた。各種画像診
断で骨盤内に原発巣を疑わせる所見は認められな
かった。血液検査では、CA125 15000U/ml以上。9
月5日手術施行、癌性腹膜炎の状態であったが、子
宮、卵巣、卵管は正常大であった。〔症例2〕63歳。
平成4年5月に便秘と腹部膨満で当院を受診。ダグ
ラス窩に腫瘤を認め、骨盤内MRIにて腹水と骨盤内
腫瘤を、直腸鏡にてボールマンI型の腫瘤を認めた。
CA125は7480U/ml。5月28日手術施行、直腸漿膜表
面に腫瘤形成を認め、癌性腹膜炎の状態であった。
卵巣には肉眼上著変はみられなかった。〔症例3〕
70歳。平成4年8月に下腹痛で受診。大量の腹水を
認め、血液検査では、CA125 746U/ml、腹水細胞診
にて腺系の悪性細胞を認めた。8月19日手術を行な
い、肉眼上、子宮、卵巣は正常大であったが、大
網に腫瘤を認め、ダグラス窩にも転移巣を認めた。

いずれの症例も、組織学的には砂粒体を多数認
め、卵巣の表面のみより乳頭状に増殖していた。
細胞学的には不規則な重積性があり、細胞が大き
く細胞質内空胞が多い腺系の悪性細胞を認めた。
一般にSSPCは予後が極めて不良と報告されている
が、いずれの症例も浸潤している結腸・大腸の切
除術、子宮卵巣摘出術及び腫大リンパ節の廓清を
行ない、術後のCAP療法にて現在寛解している。